

試験研究成果普及情報

部門	飼料作物及び草地	対象	普及
課題名：県南地域における暖地型シバ型牧草を用いた草地造成技術			
〔要約〕県南地域の中山間部に適した省力的な草地造成技術として、暖地型のシバ型牧草を放牧地へ導入する場合、草種はセンチピードグラスとバヒアグラスが、導入方法は両草種ともに蹄耕法が向いている。			
キーワード：シバ型牧草、放牧、蹄耕法、苗移植法、草地造成			
実施機関名	主 査	千葉県畜産総合研究センター嶺岡乳牛研究所	
	協力機関		
実施期間	2010年度～2012年度		

〔目的及び背景〕

中山間地の急峻な傾斜地を利用した放牧地を維持・管理していく上で、シバ型牧草の導入は有効であると考えられる。これは家畜の踏みつけや土壌侵食に強い点、多年草が多く永続性に優れている点、栽培管理が比較的容易である点、草丈が低く地下茎やほふく茎で広がり密な草地を形成する点等の特徴があるためである。しかし、傾斜地への牧草の導入は種子の流失等の制限要因が多く、草種や導入方法の違いによっても定着性は異なる。

そこで、暖地型のシバ型牧草種3草種について蹄耕法（牧草種子を不耕起播種し放牧を行いながら草地造成を行う方法）、苗移植法（育苗してから放牧地へ移植する方法）の2通りの方法で放牧地へ導入し、県南地域の中山間部に適した省力的な草地造成技術について検討を行う。

〔成果内容〕

蹄耕法区の播種密度については、各草種の発芽密度を合わせるため各草種の種子重量、発芽率をもとに、センチピードグラス 4kg/10a を基準（1倍）とし、2倍、3倍の試験区を設定した（センチピードグラス 4, 8, 12kg/10a、バヒアグラス 11.5, 23.0, 34.5kg/10a、バミュダグラス 0.92, 1.85, 2.77kg/10a）。播種は平成22年7月5日に行った。

苗移植区については、平成22年4月にセルトレイに播種し65日程度育苗した後、7月8日に各草種8苗/m²（株間距離 35cm）の密度で移植した。

両区とも牧草の導入前に地肌が見えるまで過放牧、あるいは下草刈りを行った。また蹄耕法区は種子の鎮圧のため数日間放牧を続け、苗移植区は養生のため1ヶ月間禁牧した。

1. センチピードグラスは蹄耕法による導入が適しており、傾斜の急な放牧地でも定期的に放牧を続けることで、3年で被度70%程度の草地を形成することが可能である（図1）。また草高も低い（年間を通して10cm程度）ので見通しの良い草地を形成できる。経済性を考えれば、播種量は4kg/10a程度とし、その後は定着の思わしくないところに追播するのが良い。

2. バヒアグラスも蹄耕法による導入が適しており、3年で被度50～60%程度の草地を形成することが可能である（図2）。早春の萌芽がやや遅く（4月中旬以降）6月まで草高が低いため、春から初夏にかけての生産性が低いことに留意する必要がある。
3. バミューダグラスは蹄耕法、苗移植法ともに導入には向かない（図3）。

[留意事項]

県南地域の耕作放棄地はセイタカアワダチソウやクローバー等のシバ型牧草と競合する野草が多く生育しているため、シバ型牧草の導入初期には放牧圧を高め、牛の食べ残した野草は掃除刈りをする等、放牧管理を状況に応じて工夫する必要がある。

[普及対象地域]

県南部の中山間地域

[行政上の措置]

放牧地とする耕作放棄地の確保に際して、畜産農家と近隣住民との合意形成に対する支援、及び適切な放牧管理、草地造成技術、電気牧柵の管理に対する指導

[成果の概要]

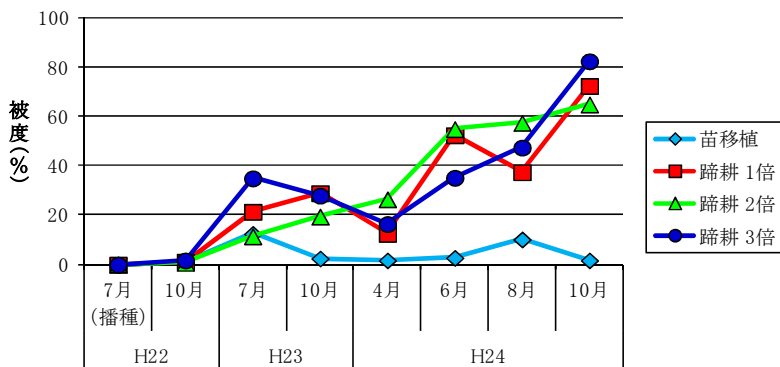


図1 センチピードグラスの被度推移 (H22～24)

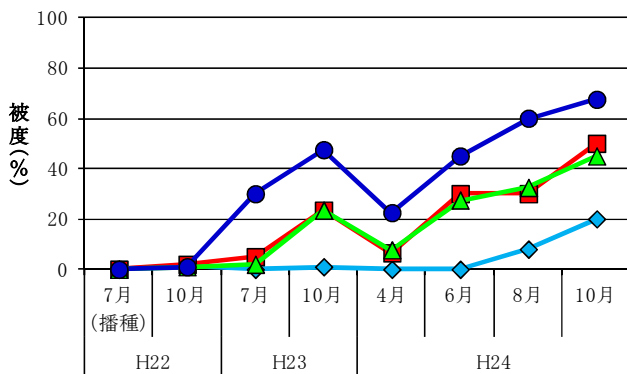


図2 バヒアグラスの被度推移 (H22～24)

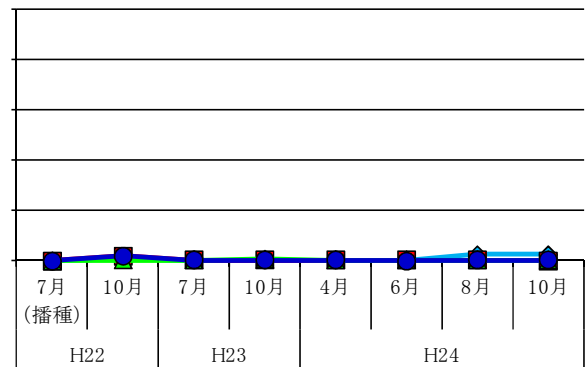


図3 バミューダグラスの被度推移 (H22～24)

[発表及び関連文献]

平成25年度試験研究成果発表会（酪農・肉牛部門）